

共生とアイデンティティの思想*

Thoughts of Coexistence and Identity

花崎 皋平
Kohei Hanazaki

李静和所長冒頭挨拶

皆さん、こんにちは。この何日か東京は雨で、花崎さんが北海道からいらっしゃるので心配しておりましたが、今日はびっくりするくらい晴れて、良かったと思います。今日はこのアジア太平洋研究センター主催で、共生とアイデンティティの思想をめぐって、花崎皋平先生をお迎えし、講演会を開くことになりました。この教室で加藤節先生がなさっている「政治学原論」の授業とのコラボレーションのかたちになります。

研究センターの所長として挨拶をしたり、あるいはゲストの方をご紹介したりという時に、日本のマナーとしては、あまりプライベートなことを混じえずに客観的にお話するのが礼儀正しいとされていると思いますので恐縮なのですが、少しだけ触れさせて下さい。

私は韓国生まれで朝鮮半島から来まして、今はこうして成蹊のメンバーとなっておりますが、日本に来て本当に大事な友人たちに出会いました。友人というよりも、尊敬する方たち、それから一緒に生きる同志のような友人たちにも出会いました。その一人であり、本当に心から尊敬する花崎皋平先生を今日ここに、このキャンパスにお迎えできることを心から嬉しく思っています。

昔も今もではありますが、私たちにとって緊迫、あるいは抑圧的な状況が生まれているかと思えます。私のように学生時代、本当に恐い時代を過ごして何とか免れ、こちらに来ている韓国の人間としては、最近の雰囲気はどこか抑圧的で、目に見えない重たい空気があります。唯一精神の自由を保っているアカデミア、大学のキャンパスの中にも、何となく重い空気が漂っているような気がします。それでもなお考えてゆく、自由な精神を保ち、個人を尊重し、風を感じ、楽しいことを考え、夢をもって一日一日を生きぬくことをどういうふうを保っていけるか、ということを考えるのを許された唯一の場所というのが、大学のキャンパスでもあるかなと思います。

そういう意味で、60年代以降の半世紀以上、歩きながらいろいろな人々と出会って、学んで、読んで、やはり書き続けてこられた花崎先生。本当にしなやかで、しかし強靱な精神を、静かに実践なさっている。朝鮮半島では文人と呼びます。静かに、しかし言葉の力、そして友だちの友情を信じて、ずっと長い間やってこられた花崎皋平先生を、今日この櫛のキャンパスにお

* 本稿は、2015年7月10日、成蹊大学にて行なわれた講演会「共生とアイデンティティの思想」（主催：成蹊大学アジア太平洋研究センター）の内容をほぼ忠実に再現したものである。なお、質疑応答については紙面の都合上割愛した。

迎えでき、ご紹介できることを心から嬉しく思っています。長くなりましたが、では皆さん、花崎皋平先生を拍手でお迎え下さい。(拍手)

I. 「亡国」の憂慮のなかで

花崎皋平と申します。今、李静和先生から、——先生という言葉はあまり使いたくないのですが、大学ですから先生とお付けします——身にあまるご紹介を頂きました。大事なことをおっしゃってくださったので。一つ私は、歩くということをとっても大事に思っていたことと、いい友達をもつというのが私にとっての大事な宝だという思いを持ってきましたので、そういう点でご紹介頂いたことを大変嬉しく思っています。

今日は「共生とアイデンティティ」というタイトルを頂いたのですが、それについてはいろいろな語り方があると思うんですね。理論的に、政治思想、政治理論の側からの語り方もあると思いますが、大学生の方、それから市民の方との対話ということを考えまして、具体的ななかたちでお話をさせて頂きたいと思っております。具体的な、と申しますのは、「民衆思想家」たちに注目するという姿勢を、近年とってきております。そういう民衆思想のにない手の話を主にするというところに致しますが、その前置きみたいなこととして、『世界』の7月号に、敗戦後70年の感想を書いたものがお手元に渡っていると思います。それはあとで読んでいただければいいのであまりお話しませんが、アイデンティティということは、一人ひとりが、自分の考え方・生き方の座標軸をかたちづくるということ。それがアイデンティティをもつということではないかと思っております。ですからいろいろなアイデンティティのあり方がある。自分で選んで、自分で、ある意味では編集して、自分はこれだというふうに自分で決める。とりあえずそういうことを基本に据えるといいのではないかと思っております。

なぜそういうことを考えるようになったかという、『世界』の文章のなかで挙げましたが、内村鑑三という明治のキリスト思想家から学んだことがあります。内村鑑三の書いたことの中にこんな言葉があります。「滅ぶべき日本あり、滅ぶべからざる日本あり。貴族、政治家、軍隊の代表する日本、是れ早晩必ず滅ぶべき日本にして、余輩が常に預言して止まざるの日本国の滅亡とは此種の日本を指して云ふなり」。「然れども、之と同時に亦亡ぶべからざる日本あり、即ち芙蓉峰千古の雪と共に不変不動の日本あり」。芙蓉峰というのは富士山ですね。「是れ勤勉正直なる平民の日本なり、天壤と共に無窮なる日本とは此の日本を指して云ふなり。是れ蜻蜓洲が太平洋の底となるまで決して亡びざる日本なり」。蜻蜓洲というのはトンボが乱れ飛ぶ場所という意味で、昔から日本のことを指す言葉です。「余輩が忠実ならんと欲するはこの不朽不滅の日本に対してなり、彼の暫時的にして、蜉蝣的なる貴族、政治家、相場師の日本に対しては余輩はただ憤怒あるのみ、憎悪あるのみ」。蜉蝣的なるというのはボウフラのようにふらふらしている、という意味です。こういう激しい言葉で、このままでは日本は滅びるぞ、という言葉を発しております。

彼は二つの「J」を愛すと言っています。英語の「J」ですね。一つはジーザズ・クライストの「J」、もう一つはジャパンの「J」。彼の愛するのは平民の日本です。この考え方から私としては、自分自身のアイデンティティを選び取るべきだ。貴族、政治家、軍隊を選ばずして、勤勉正直の平民を選ぶというあり方です。

この「亡国」、このままでいったら日本は早晩亡びるぞという言葉は、同じ明治期に、田中正造が、衆議院で「亡国論」と称される演説をしています。足尾鉍毒事件のことはご存知だと思います。

ますが、その時に奮闘して、明治天皇に直訴した話が教科書に出てくる人です。彼は鉍毒を出す足尾銅山を即刻停止させてくれ、という要求を政府に出し続けるのですが、鉍業停止を要求する渡良瀬川沿岸の住民たちが、東京まで歩いて請願をしに行こうとしました。これは「押出し」と呼ばれていたものです。それを警察と憲兵が阻止して解散させた「川俣事件」というのがあり、それに憤激して衆議院で演説した。馬に乗った警官と憲兵がサーベルを振って「この土百姓、土百姓」と言ってなぐりつけて蹴散らした。これは人民を殺そうとしたに等しい。人民を殺そうとするならもう国は亡びつつある、いやすでに亡びているのである、という大演説を行いません。そういう先人たちの、これでは国は亡びるぞ、という考え方は、戦後70年を経て、今あらためて、かみしめなければならないと思っております。

私が知る限り、太平洋戦争中には、敗戦後東大総長になる矢内原忠雄さんが、無教会派のクリスチャンで、自分の主催している小さい集会で、「神様どうか今の日本を滅ぼして下さい」と祈ったということが弟子によって伝えられています。そういう憂慮をもった思想家たち、例えば今、田中正造や内村鑑三や矢内原忠雄がいたら、今の状況をどう言うだろうな、ということをおぼろげに得ないです。そういう意味で今の時代に学ぶべき民衆思想家として、今日は、一人は田中正造、そして戦後の1960年代に、『苦海浄土』という水俣病についての記録作品から思想文芸活動を出発させた石牟礼道子の二人についてお話をしたいと思います。

II. 民衆であることに徹する — 田中正造をめぐる

田中正造については今、日本のなかで研究者は少ないのです。研究される方は、衆議院での田中正造の活動、そして直訴に到り、そしてそのあと、谷中村が廃村にして、鉍毒水をためる遊水地にするために、谷中村の人たちを全員追い出すという事件が起こるまでの田中正造を論じています。しかし私はそのあとがとても大事だと思っております。

田中正造の足尾鉍毒事件での闘いは、闘って闘って、銅山の操業停止という目的は果たせず、むしろ銅の生産活動は盛んに行なわれる状況で。闘いは敗北に終わるわけですが、田中正造は政府の谷中村をつぶす活動に抵抗した人たちと生き方を共にします。最後に16戸が住まいの強制破壊に抵抗してとどまるのです。大雨のなか、その人たちといっしょにその場に座り込みます。そして、彼は、この谷中村の農民たちを見て「発明した」といいます。自分が暗かったところを明らかにさせられたというのです。当時の小農民の多くは、文字を知らないのです。無学で、日々の生活に追われている。この人たちに「神を見る」という言葉を書き残しています。谷中村の人々から学ぶ。それまで彼は、この人たちを何とか教えて闘いに立ち上がらせようという指導者的な立場だったのですが、これ以後は、一番下層で粘り強く闘う人たちの仲間に入るということを心がけました。それ以後、被害民の若者たちを連れて、あるいは一人で、たくさんある渡良瀬川の支流を一筋一筋歩くのです。そして沿岸の人たちに、いつのときはどこまで水が来たか、あの洪水のときはどうだったか、ということを書いてそれを記録に残してゆく。洪水が起こると鉍毒水が田畑に流れて田畑が荒れてしまう、政府の側は近代的な土木事業で流す道を変えたりしようとした、正造は、その国側のあり方を徹底的に批判します、それ以降は、自分を「今は治水をいう者なり」と考えるようになります。一筋一筋の支流を徹底的に歩くなかで書いた日記と手紙が残っております。木下尚江という正造の同時代の思想家で田中正造を非常に尊敬した人が、『田中正造の生涯』という本を作っているのですが、晩年の田中正造を聖人という言葉で讃えています。私は復刻されたその本を読んでから田中正造に強く惹かれるよ

うになりました。

田中正造の思想のことを述べましたが、彼は歩くことを通じて自然に触れることを自分の方法にしています。私も歩くのが好きで、よく歩くんですけれども、歩くことと思想をかたちづくることとは深いつながりがあると思っています。思想とか勉強とかいうことは、うつむいて集中して机に向かうこと、それは大事なことで、それなしには思想を形成できませんし学問もできませんが、それと同時に仰向いて、歩きながらものを考える。まとまらないと言えば、まとまらない。漠然として、細かいことは考えられないのですが、広がりのある大まかな枠組み、そういうことを考えるには歩くほうがいい、と私は個人的に思っております。

歩くことの意味、大事さということを考えるようになったのは、田中正造と、それからもう一人、北海道をくまなく歩いて「地理取調日誌」を残した松浦武四郎を知ってからです。松浦武四郎も北海道中をくまなく歩いて、アイヌの人たちに道案内をしてもらって親しくなりました。そういう人たちが、私にとっては導きになる人です。そういうふう歩いていてうちに、人間と自然が価値において対等・平等であるものに見えてくる。環境保全とか環境保護というと、人間の生活を基準に、人間にとって大事な環境だから大切にしましょう、というのが大方の環境保護の考え方ですが、田中正造の場合は違うんです。そうではなくて、自分がむしろ自然と一体化し、自然の一部としての人、と考える。田中正造はよく人類という言葉を使っていますが、これは魚類、鳥類と同じ目線で人類と言っているんです。人だけ高尚なものという考え方は否定しています。こういう自然との一致、全体としての自然の一部として考える環境思想というのが、日本だけではなくて、20世紀後半になってからですけれどもディープエコロジーという言葉で主張されるようになっていきます。だから田中正造だけの孤立した考えではないです。

それから三番目に、民衆であることに徹する生き方に神に通ずるものを見る、という。田中正造自身が、自分はまったく学問のない農民だ、とっています。いわゆる近代的な学校には行っていない、寺子屋で昔の儒教の勉強をした人です。議員になってから自分で勉強していますが、生涯、自分は無学であって、愚か、愚であるということに徹底しています。そして農民は偉い官吏などからは無知蒙昧だといわれる。彼の場合はそれを逆手にとって「衆愚は人に愚にして、天に愚にならず」。農民が土地を守って、政府のいうことを聞かない、何て分からない奴だというふうにいわれる、それは違う。農民が自分の経験に根ざして主張するときは、それは50年、100年、その土地に受け継がれていることに根ざして考えているのだから、それを否定することは間違いである。(政府は)谷中村の農民を強制的に移住させようとするんですね。そのときに農民とはその土地に400年も生えている大木のようなものだ、その大木を根っこごと引抜いたら死んでしまう。別のところに移すことはできないのだ。その土地と農民のつながりというのは、農民がその土地を商品なり、モノなりとして所有するのではなくて、むしろ農民のほうがその土地に属して、所有されている。そういう考え方を表しているんです。鉋毒地で耕作してはいけない、といわれているところを耕させろという陳情書を出したときにも、耕す土地は、谷中村の人たちが利益をこうむって、できたものを食べなくてもいい、そこを耕す人は中国人でもいい、どこの国の人でもいい、さらに人でなくてもいい。作られたものを鳥が食べてもいい、その土地にとってはそこに作物が育つこと自体、土地が生きることなのだから、そういうことでもいいという主張をしています。

田中正造は死が近くなると、神ということをしきりにいいます。もともとはキリスト教の影響を受けた人ですが、神というのは天地自然の規則的な運行にある。天地自然は、この人には雨を降らそう、この人は日照りにしてやろうというような差別をしない。すべてに平等な働きをする。そういう天地の働き方は、神が自然と人間に対する、人になぞらえていえば、愛して

いる姿なんだといいます。田中正造は最晩年の70代になる頃、そういう神の考え方に至ったと私は考えています。

そういう神の考え方は、日本列島各地に昔からある考え方に根ざしていると思っております。たとえば私は北海道でアイヌの人々と付き合っておりますが、アイヌの人たちの宗教、宗教と言っても教義がある宗教ではないんですが、カムイという言葉で自然のなかに至るところに、自然そのもののなかに宿る神様をうやまう、そういう考え方と、田中正造は繋がっているなあという思いをもちました。

彼は、このまま科学技術の発達を無条件に進めるようなことでは、文明そのものが亡びてしまうだろうという考えを晩年に残しております。

Ⅲ. 石牟礼道子と水俣病

戦後、1950年代の末からですけれど、水俣で多くの方々が有機水銀中毒の被害を被りました。そのことを深く受け止めて思想にされた方に、石牟礼道子さんがおられます。思想家という男を思い浮かべるとというのが常識です。女性に思想家なんていないんじゃないかと思われたりいわれたりすることがあります。というのは女性の方で思想についての著書を持つ人があまりいないせいもあると思うんですね。ただ、それはおかしい。というのは、住民運動であちこちを歩きますとよくわかるんですけども、原発反対とか海を守れとか、地域の環境を守る運動で、決断の場に女性が参加して意見をいい、お茶汲みをしているのではない運動体と、男だけが座って話をしていて、女性はお茶汲みをしている運動体、に分かれるんですね。女性が活躍している運動体とか住民のグループは粘り強いんです。簡単に負けない、いったん負けてもなお粘り強く活動を続けるという傾向があります、これは経験的な観察ですけども。それは、女性のもつ思想性と関係があるんじゃないかと私は感じております。女性の中でも、ものを書き、そこに優れた思想が宿っている方の一人として、私は石牟礼道子さんをととても大切に思っております。石牟礼さんは主に小説とエッセーを書かれて、そのほかに詩歌もあり、晩年にはお能の台本を書かれたりしております。全集は全部で17巻あります。

私が石牟礼さんの書いたものに感銘を受けたのは、もちろん1969年、70年ごろに彼女が書かれた『苦海浄土』です。この作品は、水俣の患者さんたちのことを書いたものですが、そのなかにこんな一節がありますので、読ませていただきます。これは水俣病の証言です、空太郎って被害を受けた胎児性患者の小さな子どもの爺さまが、「あねさん」と呼ぶ石牟礼さんに向けて語りかけている話です。

「そら海の上はよかもね」。良い漁になって帰ろうとすると風になる。そういう時は舟の上で朝ご飯になる。「かかよい、飯炊け、おらが刺身とる。ちゅうわけで、かかは米とぐ海の水で。／沖のうつくしか潮で炊いた米の飯の、どげんうまかもんか、あねさんあんた食うたことのあるかな。そりゃ、うもうござすばい、ほんおり色のついて。かすかな潮の風味のして」。それでちょっと中略です。そういう「鯛の刺身を山盛り盛りに盛り上げて、飯の蒸るるあいだに、かかさま、いっちょ、やろうかいちゅうて、まず、かかにさす」。これは焼酎ですね、「あねさん、魚は天のくれらすもんでござす。天のくれらすもんを、ただで、わが要ると思うしことって、その日を暮らす。／これより上の栄華のどこにゆけばあろうかい」。

漁をするとか野菜を作るといのは、天のくれらすもの、無償の恵みなんですね。お金を払わなくとも、ただで恵まれる恵みです。無償のものとしてそれはある。そしてそれを「わが要

と思うしことって、その日を暮らす」、つまり、たくさんとって商売にするというのではない。自分が要ると思ったぶんだけ取ってその日を暮らす。これより以上の栄華、幸せがあるのかい、っていうわけですね。

この語りはまだまだ続くんですけども、海の魚、山の山菜や木の実、きのこ、麦、ひえ、アワ、これら無償の恵みがあり、それを必要な分だけ頂いてその日を暮らす、という考え方ですね。

私がアイヌの人たちと接していて、これとまったく同じ考え方があるわけことをおそわりました。山菜を取りにいく、山菜を取りすぎるんじゃないよ、来年の分もあるんだからね、全部根こそぎ取ってしまってはならないという昔からの教えがあるんですね。ところが商売にする人が入ってくると、それを皆取っていってしまう。そういう嘆きがアイヌの人たちの中に、最近はとても強くなっている。

こういう石牟礼さんのものの考え方の、基になっている方法があるんですね。それを自分で方法とはおっしゃってはいませんが、方法として読み取ることができる。

「もう一度、自分を無にして、自分を低くして、この世で一番低いところに自分を置いて、目線を低くして、山川を見直してみる。健やかだった私たちの、山や川や海。私たちには想像力というものがあるんですから、生存の環境みたいなものはたくさん失いましたけれども、考える力というのは残っておりますから、その考える力をフルに動員して、考え尽くして、もう一度健やかな山や川や海を蘇らせられない、ということはないだろうと思います。心にそれを蘇らせる、取り返す。自分だけじゃなくて、ご先祖様から頂いた大切な日本というものを」。

私は、これが石牟礼さんの方法だと思います。つまり目を低く、自分を低くして、目の付けどころを一番低いところに置いて、そして見るという方法です。これが書かれた文脈では自然との関係ですが、人との関係でも石牟礼さんは、最底辺の一番貧しい、一番下層の人々のところに自分を置いて、そこからものを考えていくというふうに心がけておられて、作品のなかに現れてきます。

石牟礼さんは、水俣という地域を離れずに、地域に生きた人なんですけれども、しかし地域に生きるといっても、自立を獲得する人とそうでない人がいて、石牟礼さんは本当に自前で、自分自身の自由な生き方を獲得された。それは例えば、夫と結婚した頃、結婚とは何か、毎夜毎夜のように夫と議論した。「自分は始めから妻というものになるつもりはなく、相手方を主人というものにする気もなかったようだ」、そういうふうに書かれているんですが、自前でそういう、自らの生き方を選んでこられた。それは例えば現代のフェミニズムの立場の人がいろいろ本を読んで、そこで学んでああそうかと気がつくのとは違って、暮らし方のなかで獲得した自由なあり方といっいいのではないかという気がします。

彼女の考え方は、生命というものが、人だけのものだけではなくて、世界のなかのすべてのものに生命が有形無形につながりあって存在しているんだというふうに考えて、それは幼児のありかたからも学ぶことが出来る。それでは石牟礼さんはどうやってこういうものを獲得されたのかといえば、一つは深い洞察力、共感力の働きなんですけれども、別の証言があります。原田正純さんという水俣病の治療、研究をなさった方の発言です。熊本大学でのあるシンポジウムでこういわれたのを私はお聞きしました。

「私は石牟礼さんを最初の頃から知っています。現場にびたっと付いている人でしたね。やはりこれが石牟礼さんの優しさというか、強さだと思うのです。私たちが診療のために一軒一軒訪ねていると、女性がストーカーみたいに着いて来るんですよ。何だろうと思ってね。最初は保険婦さんかと思いました。だけど、われわれが一軒一軒訪ねて診察していると、遠慮して見ておられるんですね。どうも保健婦さんじゃないようだ。では何だろう。女性が後ろから付

いて来るというのは気になるじゃないですか。一年か二年ぐらいしてから、ある日ひょっと大学に訪ねて来られて、医学用語を教えてくださいって見えたんですね。それが苦海浄土の原稿だったんです。作品のあちこちに医学用語が出てきていますが…、「これはすごい観察ですよ。石牟礼さんはある日突然現れたのではありません。現場にずっと通って、患者を見つめて付き合っただけで来たんです。器用な人がチョロッと来てチョロッと書くというのではなく、道子さんのしつこいまでの観察はすごかったですね」。こういうふうにいわれて、原田さんは若い医学生たちに教えることとして、ですね。カルテというのは、ドイツ語で一言二言書いて済ますというのが医学界のなかで結構多い、というのですね。そんなことではダメなんだ。石牟礼さんが細かく観察して書いたもののほうに、よっぽどカルテになる質があるんだ、医学用語に頼って記述するのではなく、もっと患者の側に立つあり方でないといけないんだといわれました。

それから『苦界浄土』の中には死ぬということについて、こんな考察があります。

「年取った彼ら彼女たちは、人生の終わりに、確かにもっとも深く、何かに到達する。たぶんそれは、自他への無限の慈しみである。凡庸で名もない、普通の人々の魂が、そのようなところへ到達する。哲学も語らず、文学や宗教も語らず、道徳などということも語ったことのない人々が、何でもなし、この世で一番優しいものになって死ぬ。自分がそのような優しいものになったことも知らないで死ぬ。ただただ尽きせぬ名残を残して。それこそがこのような村の魂というものだったに違いない」と。それは仏教の用語で言うと煩惱ということだ、というふうにいわれています。水俣は、浄土真宗が多くの人たちに受け入れられている風土なんですね。そういう、石牟礼さんの育った浄土真宗の精神文化のなかで、煩惱というふうな言葉で表現されているわけです。

IV. 石牟礼道子の民衆思想—『春の城』を手がかりに

石牟礼さんは、『西南役伝説』を書いておられます、タイトルは西南の役ですが、でも西郷隆盛のことは一言も出てこない、西南の役や戦士たちのことも出てこないのです。彼女がいうには、「目に一丁字もない人間が、この世をどう見ているか、それが大切である。権威も肩書きも地位もないただの人間がこの世の仕組みの最初のひとりであるから（『西南役伝説』あとがき）」と。そう考えたというんですね。「それを100年分くらい知りたい。それくらいあれば、一人の人間を軸とした家と村と都市と、その時代がわかる手がかりがつかうだろう。そういう人間に百年前を思い出してもらうには、西南役が思い出しやすいだろう」。私には、これは非常に印象に残る言葉ですね。地域の人々の記憶を百年分くらい探りたい。「目に一丁字もなき者たちが、生得的にそれを規範として生きた倫理とは、どのようにして生まれたものであるか。そういう目に一丁字もない人たちの魅力に満ちた人柄の中からこの世の綾を紡ぐ糸のように吐き出される語りかけは何を意味するのか。生得的とはどういうことか。いうまでもなく、どこにでもいた、ただの百姓、一漁師に過ぎない者の実情である。けれどただの百姓漁師のごく普通の人間像が、なぜ風土の陰影を伴って浮上する劇のように美しいのか。そのような人間たちがこの列島の民族の資質のもっとも深い層をなしていたことは何を意味するのか。そこに出自をもっていたであろう民族の性情はいまどこにゆきつつあるのか。その思いは死せる水俣のありし徳性への痛恨と重なり続けているのである。そのような者たちが夢見ていたであろう、あつてしかるべき未来はどこへ行ったのか。ありうべくもない近代への模索を私は続けていた」と。「だから水俣から文明を考える、水俣から宗教を考える、水俣から人類の歴史やモラルを考え直さなければ、

水俣から人間愛とは何なのか、哲学とは何なのか、科学とは何か。そういうのが渾然となった警告を人類の未来に対して発しなければならぬと考えております。でない悲惨な最期を遂げられた方々の魂は浮かばれません」。

こういう発想の仕方が民衆思想家の発想の仕方なんです。広く、あちこちを見渡して、鳥瞰図と言いますが、飛行機の上からのように全体を眺めるのではなくて、ある一点に立って、そこを深めることによって広がりを見いだしていく。そうしか出来ないということも含めて、そういうあり方が民衆思想のあり方なのだと思うんです。

石牟礼さんのお仕事は、私としては宗教哲学を孕むものになっていったという気がしております。彼女の宗教観、神の考え方、これも独特です。石牟礼さんは神を、人間が作ったもっとも深いものだというふうに考えるんですね。神は無名である。無名の人間とじかに接点を持っている。そういうものとしてイメージするんです。「人類が文明を持ち始めるとき、いずれの種族も神を創造していることを私は大切に思うようになった。多分その時、人は悪と罪とを知ったであろうか。救いを求める宗教ではなく、草木虫魚に至るまで、往生を共にする原始仏教、小さな神々」。そういうのを重んじると。「人のなかでもっとも美しく広い魂と等身大に向き合う小さな神々というのは、非権力、権力のない神であらねばならず、生命系の源から私たちの個体を還流して流れうる神でなければならない」。

そういう民衆のありかたというのを軸において、歴史を論述する側にある者と、歴史の内蔵そのものである基層民との違いを、自分は、はざまから見ている。そういう住み分け図を書くには、基層民の中にある宗教心の中身を取り出してみなければならない。そういうふうに宗教について考えて、展開されています。

島尾敏雄という小説家が出て、その連れ合いの島尾ミホさん、この人は加計呂麻島っていう南の島の生まれで、一種の巫女さんみたいな心をお持ちの方なんです、その方と石牟礼さんとが対談したものがあつたんです。石牟礼さんは浄土真宗の得度、お坊さんになる資格を取っておられるんですね。ミホさんは南島の民俗信仰をもっている。その二人が話されたときには、「発祥^{はじめ}の頃」、つまり人間が生まれたはじめの頃、「たぶん人々は今の人間たちよりも豊穡で、透視的な感受性の持ち主であつたに違いない。天界や自然界についてはもちろんのこと、人界のことについては、その感受性のゆえに、予感しうるすべての人間の運命に同化し、分裂せず、全体というものをしている。大達観の上に立って生きていた。いわば完璧な感応能力の持ち主がいて、互いの運命をやわらげていたに違いない。神格とはそのようなものであつたろう」。

これも私が心を打たれた一節です。民衆が宗教的世界に入るきっかけというのはいろいろであつて、教義に近づきたいというあり方もあれば、存在のあり方そのものがすでに宗教的なものを孕んでいて、それを生かすあり方がある。

「前者は自覚的意識的な苦行者であり、後者はこの世における惨めさ、苦しみだけを担わされるものであつたと思われ、というふうに人間の姿を考えられて、人間はいつ頃から祈るようになったのかなあということも考えておられる。そうすると人間の一番発祥の頃から祈るということを感じたけれども、もっと遡ることが出来る。アフリカで大草原に住み夕日を眺めているお猿さんに、祈ることの始まりを見ている。この世で一番神秘的な美しい尊いものを拝む、というか、空のほうに額づかずにはおられないということが、お猿さんの時代から存在したと考える。そういうふうになぜ祈るかということが自分のテーマだと思う、というふうに言われています。

彼女は宗教というものを体系化された教義、制度をもち教団になる前の姿、もっと始原の神

を訪ねて、そういう神は何だったかを考える姿勢をとられている。私はこの、無名、名前のない神様というのは意義深いと思っております。彼女はこんなふう言うんですね。「キリストが物語に組込まれたとき、既に生まれても、その誕生を予言する東方の三博士が現れて、なぜ最初から権威を付与されるのか。キリストは本当は無名の人だったろう。権威付けられない聖者はどうしてあり得ないか。無名の聖者は無数にいたし、今もいると思う。それは最下層の汚辱にまみれて、一切の受難を背負った人間だったろう。権威づけられず、なんの恩恵にも浴さない、いつも無名で生き続けていた最下層の人間たちが人類を生き変わらせてきた力なのではないか。慈愛とか愛とかは、仏や神が衆生に垂れるものではなくて、逆である。救われぬ人が充ち満ちているからこそ、宗教は救われ、かろうじて命脈を保っているのだ」。逆転した考え方です。「救われざる民の魂によって、宗教が逆に救われているのだ。人間の心を本当に揺り動かすことは、権威の力では出来ない」。こういう考え方、石牟礼さんの場合は浄土真宗から来ているんですが、キリスト教内部からの声としても出てきていると思います。

特に1970年代です。韓国において民衆神学が生まれ、南米では解放の神学が生まれました、そういうものには、石牟礼さんの言われていることと響きあうような考えがあります。

石牟礼さんのイメージしている宗教の姿は、長編小説では最後の『春の城』、単行本で出たときには『アニマの鳥』というタイトルでしたが、天草・島原のキリシタンの殉教のたたかいをテーマにした作品に現れています。

『春の城』という作品は、1971年に水俣病の未認定患者とともに東京のチツソ本社前に座り込んだときに、天草・島原の乱で原城に立てこもった名もなき人々の身の上がりきに心に浮かんだ。そのときから天草・島原の乱の物語を書きたいという願いを持ったと書かれています。

この物語には実際の乱のことも少し出てくるんですが、それは中心ではないです。天草の農民である仁助の家、キリシタンですが、その家に、もともと仏教徒である家から娘さんがお嫁に行って暮らしている。物語はどんなにキリシタンたちが苦勞して、ひどい目にあったかということが出てくるんですが、この農家に家事手伝いで働いている「おうめさん」というのが主な登場人物です。このおうめさんは、南無阿彌陀仏を信じている50過ぎの働き者なんです。農民は凶作が続いた上で、年貢の取り立てで生活に困窮して、どうしようかという話になるわけです。やがて天草四郎が登場し、彼を精神的な柱にして一揆に登り詰めるわけです。物語の流れの上では、侍はもとより、キリシタンの百姓たちの家族は皆、天上の楽土、アニマの国を目指して、原城で殉教します。

この物語のなかで石牟礼さんが書いているのは、おうめさんなんです。一揆に立ち上がる前に、仁助という家の主人が、仏教徒のおうめに里に帰るようにいいます、あんたはキリシタンではないのだから帰んなさいというと、おうめはそれを拒んで、それまでいわなかった自分の話をするわけです。自分が「ナマンガブ」を通して「アメン」にならなかったのは、自分の父が観音様への信心の篤かった人で、木で観音様を作って、それを奉納して、赤ん坊のときに痲瘡で死にかけて自分が治るように祈ってくれた。ところが伴天連が来てから、観音信仰を邪宗だと決めつけて、仏像を全部打ち割って、よい焚き物が出来たと言ったと聞いたと。それに対して旦那様は「アメンも言わぬ人間をば責めもせず、大事にして今まで使うて下さりやした」、仏教の坊さんにも墮落した者がいるし、アメンの衆にもろくでもない者がいる。デウス様が観音様を焼き討ちにするとおっしゃるわけがない、と言うんですね。「あたいはここのお家に来て、本物のデウス様と本物の人の姿を見せてもらいます。父つあまの願かけなさいた観音菩薩とマリア様が二人会われたなら、仲良う、いよいよ優しゅうなられるとあたいは思います」、と、こう言うんですね。だからこのおうめさんに、マリア様と観音様との和解と融和を語らせた

思います。

仁助が「おうめ。お前が長い間、叩き割られた観音様を大切に、心に仕舞いこんで、わしらのデウス様にも尽してくれたのにくらべ、わしは自分の宗門にあぐらをかいて、へりくだりを忘れておった。この期になって、わしは恥じ入るばかりじゃ。お前こそ観音様の化身じゃと、今にしてわかる」というふうに答えています。おうめさんは、これまで良い暮らしをさせてもらった、「死ぬ時は一緒でござす」といって一緒に殉教する、という物語です。

ここに石牟礼さんの宗教についての考え方がよく現れていると私は思います。権威付けられず、いつも無名で居続けてきた最下層の人間たちが、人類を生き変わらせてきたのではないか、宗教がこの人たちに愛と慈悲を垂れてきたのではなくて、この人たちが宗教を救ってきたのではないか、といった考え方ですね。しかし現実にはそうではなくて、和解と融和は実現しないのです。そういうイメージを持ちつつ、おうめさんは、キリシタンの仁助の一族とともに、原城に籠って死んでゆきます。宗教というのはこういう、現世を超える強い力、とくに否定を通じて肯定を実現しようとする、強い力を持っているように思います。そういうことが、この石牟礼さんのメッセージのなかに込められているというように思います。